

遙かなるグラインドボーン

紹介者



津野正則氏

ラッセル・インベストメント・グループ
取締役会長



松島正之氏

クレディ・スイス証券
シニア エグゼクティブ アドバイザー



今回は

芦田昭充氏

(商船三井 取締役社長)
にご登場いただきます。

イギリスの夏の風物詩、グラインドボーンのオペラは、ピクニックから始まる。北緯51度、夏の日は長い。まだ眩いほど明るい芝生の庭園で、友人や家族と持参の冷えたシャンペンやピムスを飲んで、5時過ぎの開演を待つ。前方が開けた芝生からは、なだらかに深緑の起伏が遠く続いている。近くでは、牛や羊が静かに草を食べている (ha-haという仕掛けで、ピクニック場には来られない)。庭は、池や生垣に縁取られ、パステルカラーの花が風景に溶け込んでいる。

今宵集う人は、女性はイブニングドレス、男性は黒と白のペンギンスーツだ。ドレス・コードは強制ではないと案内には書かれているが、実際は、殆ど伝統に忠実だ。着飾った紳士淑女が談笑している姿を見ていると、一瞬印象派の絵画の中にあるような幻想にとらわれる。

ピクニックのハイライトは、幕間の食事である。休憩時間はたっぷり一時間半近くある。前もって陣取っておいた場所に戻って、バスケットからチキン、パテ、キャビアなどを取り出し、ワインを飲み交わす。観たばかりのオペラ前半の話に花が咲く。暮れなずむ夏の夕暮れ、頭をめぐらせば、誰もが満ち足りた表情だ。

そして、ピクニックの締めく

くりは、舞台が引けた後のコーヒー1杯。濃紺の空の下、感動の余韻にひたりながら、西の空を見れば、壮大な夕焼けの最終楽章だ。

グラインドボーンが人を惹き付けるのは、ピクニックだけではない。出演者に著名な歌手はいない。8週間のリハーサル合宿が義務付けられているからだ。そのため、舞台のアンサンブルは完成度が高い。また、新人歌手の登竜門でもある (あのパヴァロッティは、古く1964年に歌った)。

しかし、グラインドボーン音楽祭への道のりは遠い。まずチケットである。5月末から8月まで (公演回数70、客席数1200) に期間が限定されているうえ、財政支援をしているスポンサー優先であるから、4月から始まる一般応募で手に入れるのは容易ではない。そして、時間も問題だ。ロンドンから少なくとも車で片道2時間はかかるうえ、ロンドンに戻る頃には真夜中を回っている。だから、ロンドン近郊への在住に加え、幸運という条件が揃わなければ、音楽祭には行かれない。

グラインドボーンは、私の記憶から消えることはないが、もう一昔前の思い出だ。記憶の映像が、夢のようにぼやけてきたのはやむを得ない。